慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田中舘愛橘のローマ字がつなげたドイツ人・クナウプ教授と岩手県二戸：二戸でのクナウプ教授
Sub Title	Kunaupu san
Author	菅原, 孝平(Sugawara, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.55 (2018.) ,p.187- 192
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	ハンス・ヨアヒム・クナウプ教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Hans-Joachim Knaup 退職記念に寄せて
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20180331-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

退職記念に寄せて

田中舘愛橘のローマ字がつなげた
ドイツ人・クナウプ教授と岩手県二戸（にのへ）
二戸でのクナウプ教授

菅　原　孝　平

クナウプさん

のっけからで失礼とは思うが，慶應義塾大学経済学部のクナウプ教授は，わたしたちにとってはクナウプ教授でもクナウプ先生でもなく，なぜか“クナウプさん”である。

田中舘愛橘 TANAKADATE AIKITU　とローマ字

クナウプさんの日本でのローマ字研究で，避けては通れない人物がいた。その人物とは当地（岩手県二戸市）出身の物理学者・田中舘愛橘 TANAKADATE AIKITU である。

田中舘愛橘といっても現在では“はてなマーク？”に思う方だけかもしれないが，東大一期生から東大教授となり「日本物理学の父」と呼ばれ，「海外において本格的な物理学を学んできた最初の日本人」（『日本の科学技術 100 年史』）と評される明治・大正・昭和の物理学者である。

その活躍は広範囲にわたり物理学の範ちゅうを超えている。航空便のなかった時代に 22 回の海外出張，68 回の国際会議出席という経歴をもつ。

愛橘は地球物理学と航空学への貢献で 1944（昭和 19）年に第四回文化勲章を受章したが，第一回文化勲章の長岡半太郎・本多光太郎・木村栄や

「天災は忘れた頃にやってくる」で知られる寺田寅彦らの物理学者はみな弟子である。

東大名誉教授となり日本学士院会員・貴族院議員などを歴任し1952（昭和27）年，95歳の天寿を全うしたが，当時の男性平均寿命は60歳だった。葬儀会場は東京大学安田講堂であった。

愛橘は，1872（明治5）年9月に慶應義塾に入学しているが，月謝3円は高額で負担が大きく在学3カ月でやむなく退学した。しかし慶應義塾大学関連の情報では，慶應ゆかりの人物としてあげられているようだ。

さて先に幅広い活動分野と述べたが，その一つに1885（明治18）年からのローマ字の考案・普及がある。日本式ローマ字とか田中舘式ローマ字と呼ばれ，その普及に生涯をかけた。ヘボン式と異なり日本語にマッチしたもので，小学校教科書の訓令式ローマ字の土台となった。だから愛橘は出身地の二戸などでは「ローマ字博士」で親しまれ，膨大なローマ字日記が残されている。

クナウプさんと二戸の出会い

数年前のある日のこと，二戸市にある田中舘愛橘を顕彰する記念科学館に，外国人が訪れた。慶應義塾大学経済学部教授ハンス・ヨアヒム・クナウプ先生であった。田中舘愛橘のローマ字について研究されているという。偶然にもそこに居合わせたのが田中舘愛橘会事務局長の中村誠さんだった。

中村さんは，1986年に設立した顕彰団体・田中舘愛橘会の第2代事務局長として博士の事績研究・発信など顕彰活動推進の中心人物だから，クナウプさんにとってこれ以上の幸運な出会いはなかったといえる。

ローマ字がお二人を引き逢わせたわけで，逢われるべくして逢った“最高の出逢い”である。愛橘は地磁気研究のパイオニアであったから，その地磁気という赤い糸が結びつけたのかもしれない。

中村誠さん

中村誠さんは実に穏やかな風貌をもち，かつ温厚な人柄なので誰からも愛されていた。愛されていたと過去形にしたのは残念ながら昨年 2017 年 8 月 5 日，急逝されたのである。享年 65 歳，心筋梗塞だった。「明日会いましょう」と前日には電話で元気に語り合ったその翌朝のことである。早すぎた。惜しんでも惜しみ足りない大切な友人との，あまりにも突然のお別れだった。

クナウプさんは多忙な学究生活の中，わざわざ岩手・二戸まで墓参りにおいでくださった。

「見返りを求めない〈滅私〉の原点は，生まれ育ったふるさとへの想いであり，ふるさとの未来のために自分が何をできるのかを自問自答される中で，博士との出会いがあったのではないか」と愛橘会会長は述べている。博士を愛し，その研究や情報発信などでまたとない懸けがいのない人物だった。

中村さんは自他ともに許す“博士にハマッタ，そして多才な男”だった。

地元演劇活動の大きなリーダーとして脚本・作詞作曲・演出などを手掛けてきた。博士没後 50 年記念事業の一環として 2002 年 8 月には二戸市民文化会館でミュージカル「Aikitu・田中舘愛橘物語」を上演した。さらに秋の二戸祭りでは山車に『風流　愛橘の大鯰退治』を，またアインシュタインやキュリー夫人など博士ゆかりの人物で仮装行列をプロデュースするなど，中村色を遺憾なく発揮して好評を博した。

物理学者がミュージカルに？　本当の話である。亡くなる直前にも「今なら，もっと中身の濃いよいミュージカルができる，したい」と熱く思いを語っていたのが強く印象に残る。

また中村さんは，岩手県紙・岩手日報に生誕 150 年の記念記事『肝を練れ――田中舘愛橘の事績』（全 10 回）を連載し，青森県紙デーリー東北に『今やらねば――田中舘愛橘の生涯』（全 20 回，共著）連載するなど実に精力的な活動を展開してきた。

クナウプさんとのお付き合い

こういう中村さんだから，クナウプさんをすぐわたしに引き合わせてくれた。初対面なのに，何故かまったくそんな感じをあたえないクナウプさんだった。大学教授であるが，柔和なお顔でつぎからつぎへと軽妙にしかしアカデミックな話題を展開していくクナウプさんは，わたしには仏文学者ではないかと思わせられたのだった。その気配りはわれわれ日本人以上に日本人らしいお方だ。

言葉の訛りに話が及んだ時のこと，クナウプさん「わたしのドイツ語も東北訛りですよ」と。一瞬“？”。ご出身がドイツ東北部とお聞きしておもわず笑いが――。日本式ローマ字はもとよりいろいろな言語や田中舘愛橘の業績などなど未知のことがらが目の前にどんどん広がる，クナウプさんとの会話。まさに「未知との遭遇」の連続である。たぶん人一倍好奇心の強い中村さんやわたしにとり，時間のたつのを完全に忘れている時間！

こんな幸せな時間を持てた喜び，しかもドイツ語ならぬわかりやすい日本語で。

さらにここに三角（みすみ）義彦さんが加わる。岩手県希少動物植物調査専門調査員の肩書を持つ，根っからの自然愛好家。野鳥研究家でもあるクナウプさんとは，すぐに意気投合。トリで馬が合う仲に。

ありがたいことに，クナウプさんお気に入りの金田一温泉・きたぐに旅館にまで押しかけ，夕食をともにしながらというお付き合いにまでになっていった。話題に事欠かない仲間，地酒・南部美人を飲みながら話は延々と続く……。ところが中村誠さんは，生まれつき正真正銘の下戸。だが，酒の勢いが加わったわれわれよりも熱いのが中村さん。いうなれば“談論風発金田一温泉きたぐに旅館版”だ。

夜の更けるのを忘れて話が続くが，翌朝はシャッキっとしてフィールドへ出発というタフなクナウプさん。野鳥探訪であちこちの高原へ出向き，高原野菜地ではトラクター操縦に挑戦するかと思えば，近くの教会でオルガン演奏に時を忘れる……。

また厳冬のある夜。予定外のことであったが，二戸市内の400年以上の歴史を持つ国の選択無形民俗文化財「サイトギ」にお誘いした。小さな神社に伝わる五穀豊穣・無病息災を祈願する伝統神事。即「行きましょう」。マイナス7℃の肌を刺す冷気の中，男衆の水ごり，裸参りそしてクライマックスの舞い上がる火の粉の向きから作柄を占う火祭りと一連の神事に感激されたこともあった。

ヨーロッパなどでは，仕事とプライベートをきちんと区別し，休日は自然とのふれあいで心身のバランスをとっているとよく聞くが，まさにその生きた見本が目の前のクナウプさんとお見受けをした次第。

クナウプさんによる講演

この交流を通じて田中舘愛橘会では，必然的にクナウプさんのお力を借りることになった。それは恒例の総会での講演であった。例年は命日の5月21日。大学も新学期が始まったばかりの大切な時期なのに，クナウプさんは快諾してくださった。言語学者クナウプさんによる日本式（田中舘式）ローマ字の解説，これは願ってもない場面だ。しかもクナウプさんの母国ドイツは若き田中舘愛橘が留学した国。わたしたちにはなかなか分からない留学時代のドイツの歴史，社会背景などを解説していただける。こんなラッキーなことはない。それもこれも田中舘愛橘の日本式（田中舘式）ローマ字が，呼び寄せたこと。

そして実現した講演は実に4回に及ぶ。

2013（平成25）年5月21日「グローバル精神の先駆者としての田中舘愛橘先生」

2014（平成26）年5月21日「田中舘愛橘先生の時代とヨーロッパの技術革命の背景――鉄道・タイプライター・航空機」

2015（平成27）年5月21日「田中舘愛橘先生のベルリン体験――日記と出会い――」

2017（平成 29）年 5 月 20 日「第 14 回国際連盟総会における田中館愛橘先生の英語講演――講演のオリジナル原稿に関連して――」

田中館愛橘会 31 年間の歴史で，初めてのことである。

この度，定年退職となられるそうだが，これからもいろいろな機会にお会いして，親しくご教示いただくことを願ってやみません。